

特集

日本再興の大波を起こす

経営思想家 田口佳史、
乾坤一擲の大仕事

けんこんいつてき

高久 多美男一企画・構成・取材・文・レイアウト

Text by Tamio TAKAKU

渡辺 幸宏一撮影

Photographs by Yukihiro WATANABE

瀕死の重傷

水牛の角に体を切り裂かれ、死の淵から甦った意味

二十五歳の転機

その時、田口佳史はバンコク郊外ののどかな農村で記録映画の撮影をしていた。

水田の中にある農家の庭先で、少年が二頭の水牛を使って脱穀しているのが目に映った。和牛の二倍ほどもある、筋骨隆々の巨軀と猛々しい角に魅了され、その美しさをなんとしても撮りたいと思ひ、近づいた。

その時である。撮影機材に刺激されたのだろうか、ふだんは穏やかな水牛が、満腔の怒気を擁して突進して来たのだ。田口は、逃げるすべもなく角で右の腎臓を突かれ、空中に放り投げられた。体は裂かれ、背骨の一部を吹き飛ばされ、内臓が飛び出した。地面に叩きつけられても水牛の攻撃は終わることなく、再び他の水牛から背中を突かれ、放り投げられた。それまでののどかな風景が、修羅場と一変した。凄惨な血祭りは十五分ほども続いたという。

その時、同行していた撮影クルーは、誰一人なすすがなかった。内臓が飛び出してしまった人の処置をどうしていいのかわからず、茫然自失となっていたのだ。

しかし、不思議なことに、それほど体を切り裂かれても、田口の意識は冴え冴えとしていた。まるで月光のごとく、明瞭だったという。取り乱す

ことなく、破れたシャツの切れ端や稲わらなどが付着している自分の内臓を肉の破れ目から体内に戻した。

それからクルーたちは田口を車に乗せ、猛スピードで病院へ向かった。

「とても不思議だったのは、死が近づくにつれて意識が冴えてきたことでした。痛みも感じず、感覚はますます研ぎ澄まされ、見えないものが見えるようになってきたのです」

どういふものが見えてきたのですか、と問うとおかしな話と笑われるかもしれないけれど、と前置きした後、こう続けた。

「突如、白髪の老人が目の前に現れ、私たちは会話を交わし始めました。会話の内容は一字一句明瞭に覚えていますが、いわゆる默契を交わしたわけですので、内容については口が裂けても言えません。話の決着がついた瞬間、田んぼの中からパトカーが現れ、スピード違反で捕まってしまいました。しかし、それで助かったとも言えますね。事態を知ったパトカーに先導され、短時間で病院へ搬送されたのですから」

たどり着いたところは、シリラ王立病院。

しかし、駆けつけた医師は、田口の体を見るなり、治療を拒否した。手のほどこしようなないと見たらしい。

その時、幸運だったのは、同行していた通訳のタイ人が医師を説得してくれたことだ。「この人は外国人だ。必要な手当をしなければ外交問題になるぞ」と脅しにも似た口調で医師を説得し、止血やレントゲン検査などの必要な措置をとらせた。

それから間もなく、田口は意識を失う。

「意識を取り戻したのは三日後の夜でしたが、それから十日間は生死の境を彷徨っていたのだと

思います。『あの世』もかいま見ました。一面咲き乱れる色とりどりの花々が青空の下、どこまでも広がっている。ぼかぼかと暖かい陽気まで感じました。しかし、なんとか峠を越し、もしかすると助かるかも知れないと思い始めた頃から急に死の恐怖が襲ってきました。自分は死ぬと覚悟していた時はそういう恐怖はなかったのに、生きられるかもしれないと思った途端、死が怖くなったのですから、不思議ですね。とにかく死ぬのが怖かったです。目を瞑り、このまま眠ってしまったら二度と目を覚まさないのではないかと考えただけで恐ろしくなり、一晩中起きていようとしていました」

何度も死を宣告されたが、その都度蘇生した。

田口の全身全霊が「生きたい」と希ったのだろう。検査の結果、左側の腎臓など内臓や背骨の損傷、左脚の機能不全などが判明したが、驚くことに水牛の角による裂傷は動脈と脊髄をそれぞれ一センチ程度かわしていることがわかった。

蛇足ながら、田口にはそれがどうしても偶然の結果に思えず、何らかの見えない力に守られた、と思えた。そして、それが後に大きな圧力となって田口にのしかかってきたという。

「わずか一センチの差で致命傷を逃れた意味は何だろう、何が私を守ってくれたのだろう、そこにはどのような意味があるのだろう、あるとすればどのような方法でそれに応えなければいけないのだろう、とずっと煩悶していました」

生きたいと願うようになってから、激しい痛みを知覚した。魚に包丁を入れるのと同じように体を切り裂かれ、内臓をえぐられている。激痛がないはずがなかった。どういう態勢になっても傷口が床に触れた。一日中「very pain!」と叫んで



大事故の直前、海外の撮影現場にて



映画『東京オリンピック』を撮影していた頃。国立競技場オフィス前で。

いたという。

「まさにあれは地獄の痛み。何日も生きた心地がしませんでした」

痛みを感じるということは、もっと生きたいという意思のあらわれでもあるのだろうか。田口は、満身に激しい痛みを感じながらも、少しずつ体が治っていくのを感じた。

しかし、いまだに後遺症は残っている。

「長年、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に悩まされました。いきなり人が目の前を走り抜けただけで、心身がパニックを起こしてしまうのです。あれほどの恐怖が他にあるかと思うほど、壮絶な恐怖です。それに、六十七歳になった今でも一時の休みもなく脈を打つと同じタイミングでずっと痛みは続いています」

常に体の内側が痛みを発していることに、どのように対処しているのだろう。

「人間というものは不思議なもので、十年くらいたつと、体がうまく痛みをかわすようになるのです。いちいち痛みを意識していたら、何もできません。それに、痛みが気をとられているようではダメなのです。痛みがあることなんて忘れてしまいうくらい、常に何かに没頭しているようであれば痛みとはつきあえませんか」

二十五歳までの田口佳史

一九四二年、つまり戦争の真っ最中に生を受けた田口は日本大学芸術学部に進学、大学三年までにほとんどの単位を取得し、学生生活最後の一年間は映画製作に携わりたいたいと東映の門を叩いた。一年間、バイトの身で映画製作に携わった後、さらに大学を卒業する時、正式に採用試験を受け、

日本映画新社（東宝全額出資の子会社）に入社した。

そこでは黒澤明の『赤ひげ』製作チームの一員になったこともある。現在の田口は温厚で、まるで大きな山のように泰然としているが、当時は黒澤に直接苦言するほど鼻づ柱が強かった。その後市川崑総監督『東京オリンピック』のチーフ監督に抜擢され、記録映画の脚本・監督として活躍するようになる。

「今から振り返れば、あの大事故の前と後では、とうてい同じ人間とは思えないほどに一変しました。それまでは、自分が表現したいことをいかにうまく表現するか、ということだけを眼目に生きていました。当時は気づきもしませんでした、やはり自己中心的だったと言っているでしょう。

わがままじゃないといい映画は作れないとさえ思っていましたから。そういう私が、あの大事故によって、人間は自分以外の人たちや動植物を含めた自然界のすべてによって生かされているということを知り始めたのです」

約三ヶ月後、退院し、日本に帰国することができたが、人工透析の可能性は依然としてあった。左脚も微動だにしないだったので、切断し、義足にすることが決まっていた。保険に加入していなかったのも、治療費なども含め、膨大な借金も背負っている。さらに、その後も膨大な治療費がかかることは明白だった。病院のベッドに横たわりながら、自分はこの先、いったい何ができるのだろうかと考えると、暗澹たる気持ちになった。片脚がなく、週に数回、人工透析を受けなければいけない二十代の若者に前途はないと思い、絶望感が募った。

少しずつ快復するきっかけを作ってくれたのは、

「絶え間なく襲ってくる激痛の中で読んだ、一冊の書物によって人生が変わりました」



32歳の頃。初めての講演風景



31歳の頃。起業直後

母親だった。東洋医学療法など、体にいいと聞けば、どこへでも連れて行ってくれた。
やがてそれらが功を奏し、少しずつ快復の兆しが現れ、それまで一切動かなかった左脚が動くようになり、わずかながら腎臓が機能し始め、片脚切断と人工透析を逃れることができたのであった。
結局、二十五歳から三十歳までの五年間、田口は全国およそ三百ヶ所の民間療養所を訪ねている。体を治したい、人に迷惑をかけず自立して生き続けたいという一心がそうさせたのだ。

中国古典思想との出会い

二十五歳の時に体験した重大事故は、田口から多くのものを奪い、そして多くのものをもたらしたと言っている。なぜなら、田口も述懐するように、その事故の前後では、まるで人が変わってしまった。ということは、事故がなかったら、まったく別の人生を歩んだ可能性が大きい。

今、田口は、「こんな幸せな人生はない」と自分の来し方を振り返るが、はたしてあの事故がなかったら、田口に生きる勇気を与えてくれた中国古典思想との邂逅はあっただろうか。よしんば、出会いがあったとして、それをとことん学んで自らの血肉とし、人生の羅針盤となるまで昇華させることができたであろうか。何十年も社会の最前線で活躍できるだけの内燃機関となりえたのだろうか。

中国古典との出会いは、ひょんなことからやってきた。まだ、バンコクの病院に入院している時だった。田口の事故を伝え聞いた在留日本人が見舞いにやってきて、ある差し入れを置いて行ったのである。

それが、『老子』だった。その後の田口佳史の人生は、その書物によって根底から変わることになるが、優れた書物というものは、本来そのような力を内包しているのだろう。

田口は絶望感に打ちひしがれ、絶え間なく襲ってくる激痛のなかで、藁にもすがる思いで文字を追った。漢語の原文と読み下し文のみが書かれている本で解説がついていたわけではなかったが、不思議と理解することができた。それまで、読み下し文に親しんでいたわけではない、『老子』についての知識も皆無であった。それなのに、難しい言葉がスラスラと頭に入ってきた。極限の痛みで書物を読めるような状態ではないのに、まるで乾いた土地にみるみる水が沁みこむように田口の頭に老子の思想が入ってきたという。

感覚が剥き出しだったのだろう。生きるすがすがしさを希求する田口の魂と『老子』に書かれてある言葉が融合したのだ。そう考える以外に、ない。

そのようにして、田口は肉体的な後遺症と中国古典思想という、重大事故がもたらした二つをもつて、日本へ帰ることになるのである。

その後、日本に戻った田口は『莊子』へと読み進め、老荘思想に頭のでっぺんからつま先まで浸かることになる。

あとで詳しく述べるが、三十歳で起業してから数年間で、田口は日本を代表する多くの経営者に、経営の根本を指導するほどに急成長している。経営の経験がほとんどない者が、日本を代表する会社のトップに、経営者としてのあり方を説くことになるなど、当人でさえ想像もできなかっただろう。それを可能にしたのは、一にも二にも中国の古典思想を貪り学び、真理を探究しようという姿勢を続けたからである。

骨の髄まで学ぶということ

学んで学んで、学び続ける。そこから活路が拓けた

雇ってもらえなかったから起業した

田口は三十歳で起業する。

起業とは言っても、世間一般の勇ましさや華やかさはない。ひとことでは言え、やむにやまれず、起業するしかなかった、ということだろう。

二十五歳からの五年間は治療と中国古典の勉強に専念した。三十歳を目前にし、少しずつ普通の生活がおくれるようになってきた頃、何か仕事に就きたいと思った。しかし、当時の田口にできる仕事はきわめて限られていた。

背骨に障害が残っていたので重い物を持つなどの肉体労働はできない、左脚もまだ十分に機能していなかったので歩く必要のある仕事にも就けない、腎臓に障害があったので頻繁にトイレに行ける場所でもなければいけない、いつ体調が悪くなるかわからないので、時間の約束がある仕事にも就けない……。加えて、最も障害となったのは、PTSDだ。子どもが前を走り過ぎただけで想像を絶する恐怖が襲ってきて、布団を被って恐怖が立ち去るのを待たなければならなかった。

つまり、それらの条件を勘案すると、田口が就ける仕事は皆無であつたろう。

「ですから、自分で会社を興す以外になかったのです」

そうしてできた会社が、株式会社イメージ・プランである。経営コンサルタントや企業の人材育成を業務の柱として掲げた。

「それまでの五年間を思い返すと、いかに多くの人たちの世話になったかということを痛感したのです。だからこそ、人の役に立つ仕事をしよう」と心に決めました。そこで、広く社会を見渡すと、世の中は企業社会だということがわかりました。

ということは、いい会社がたくさんあれば、それだけいい社会になると思つたのです。そこで、企業の役に立つ仕事をしようじゃないか、と思い、その業種を選んだのです」

しかし、田口自身、経営の経験があるわけではない。勤めたことがあるといっても、映画会社で記録映画を作っていたことだけ。そういう経歴を見て、経営のコンサルティングをしてほしいと依頼してくる人など、いるはずもない。

会社を設立したものの、仕事の依頼はまったくないという状態だった。

髄が理解するまで学ぶ

田口はしばしばこう言う。

「理解には、四つの程度がある。すなわち皮膚の理解、肉の理解、骨の理解、髄の理解である。皮膚の理解はすぐに忘れてしまう。骨の髄まで理解を浸透させなければいけない。そのためには、繰り返し、徹底して学ぶことだ」

なぜ、それをことさらに強調するかといえば、自分がそれを実践し、そのことによって豊かな人生を生きてくることができたからだ。

当時の田口に仕事はなかったが、時間はたっぷりあった。人は時間がたつぷりあると、無為に過ぎがちだ。しかし、田口はとことん勉強にいらした。来る日も来る日も、朝から夜まで四書五経を読み続けた。読むというより、貪り漁るといった方が近いかもしれない。ちなみに四書とは、儒学でたつとぶ四つの本で『大学』『中庸』『論語』『孟子』をいい、五経とは『易経』『詩経』『書経』『礼記』『春秋』をさす。

「なにしろ生きていかなければならなかったので、



おびただしい数の付箋が壮絶な勉強を物語る。

真剣でした。自分にできることは学ぶことだけです。死にものぐるいで勉強しました。皮膚から肉へ、そして骨の髄まで沁みこむまで、ひたすら学び続けたのです。すると、ますます面白く感じられるようになりました。あ、そうか、あ、そうかの連続で、霧が晴れるようにさまざまな物事の根本がわかるようになってきたのです」

人間とはどういう存在か、なぜ生まれてきたのか、天性とは何か、人間の役割とはどういうものか、いい人生をおくるためにはどうすればいいのか、どういものが幸せなのか：多くの人が直面し、その答えを見いだせずにいる根元的なテーマに関する真理が四書五經にまつていることを知った。そして、それらを学ぶことこそが自分を助けてくれる道であると確信を得たのである。

「誰かにやれと言われてやっている勉強ではありませんから、面白くて仕方がないのです。例えば、ある書物を読んでいて、その中の一ヶ所が気になる、そのことが書かれている書物を手に入れ、それを学んでいるうちにまたどこかが気になり、その類の本を読む。その繰り返しです。これほどスリリングなことはありませんね。人が生涯を賭けて突きとめた真理が書物となつて著され、それを自由に味わうことができるのですから、ありがたいものです」

学びは自らを助く

三十代前半、田口がいかに激烈に学んだかということはわかったが、さらに驚愕するのは、現在の方がもっと学んでいる、と平然と言つてのけることだ。

「なぜなら、学ぶほどにわからないことがあるこ

とがわかり、とめどがないからです。今まで数え切れないほど繰り返し読んだ四書五經ですが、読むたびに新しい発見があるのです。まるで初めて読んでいるような錯覚を覚えるほど新鮮です。まさに筆舌に尽くしがたいという表現がぴったりですね。中国古典には汲めども尽きない魅力があります」

子貢問ひて曰く、

何如なるを斯れ之を

士と謂ふ可きかと。

子曰く、己を行ふに恥有り、

四方に於て、

君命を辱めざるを、

士と謂ふ可しと。

立派な人間とはどういう人でしょうか、という問いに、孔子は「自分の行動や言葉の至らないところを知っている人だ」と答えている。日本にも同様な意味の諺がある。

実るほど頭を垂れる稲穂かな

つまり、立派な人間とは自分を高めれば高めるほど自分の至らなさに気づき、傲慢にならず、至らなさを克服するべく学び続ける人をいう、と孔子は言っている。

まさしく田口佳史の生き方そのものではないか。だからこそ、田口は常に成長し続け、自らを幸福と思い、多くの人たちに理想の生き方を示し続けることができるのだ。

帆に風を受ける

赤貧洗うがごとしという経済的困窮を、中国古典と妻の助力によって乗り越える

妻と中国古典が難局を救ってくれた

前述のように、三十歳で起業したものの仕事はほとんどなかったため、三十代の十年間は「赤貧洗うがごとし」だったという。それでも惨めな思いをしないで済んだのは中国古典、そして三十歳の時結婚した妻のおかげだと田口は言う。

「母は易経の大家で、自宅で講座を開いていました。若い頃、私はそれが嫌でずいぶん反発したものです。私の妻となつたのり子は母の講座に通っていた人だったのです。それまで私は一度も話したことはありませんでしたが、母が『あの人はとてもいい娘よ』と薦めてくれたので、一度会ってみることにしました。不自由な体で仕事もできない息子を不憫に思ったのでしょうか。あの時、彼女に会えたのは、まさしく天の導きだったと思います。会って三日後にプロポーズし、承諾を得、すぐさま教会を予約しました。よく、二人なら苦労は半分に、飲びは二倍になると言われていますが、当時の私もそういう動機で結婚したのです」

体が不自由で仕事もなく、将来どうなるかもまったくわからない男性からのプロポーズに即答したのり子さんの覚悟もあつたのだという他はない。「条件」よりも目の前の「人物」を見て決めたのだろう。

「軽はずみな動機で結婚しましたが、いっしょに生活を始めると、十年も二十年もつき合ってから結婚したかのようにお互いが馴染んでいました。妻は暮らし方が本当にうまいんです。少ないお金を実にうまく使う。やがて子どもも二人生まれ、たしかに赤貧という言葉がぴったりの状態でしたが、いかにも貧しいという思いは一度もしたこと

結婚後間もなく妻は無給の事務員となり、夫をサポートすることになる。

このエピソードには、多くの教訓がある。何をもって貧しいというのか。自分の境遇を貧しいと思わなければ、貧しくはない。貧しさとは、心のあり方なのかもしれない。前号特集で紹介した兼元謙任氏のように、この国ではホームレスからだつて再起できるのだ。

結局、田口は全身全霊で学び続けること、そして伴侶の助力を得て、最大の難局を乗り切ったのである。

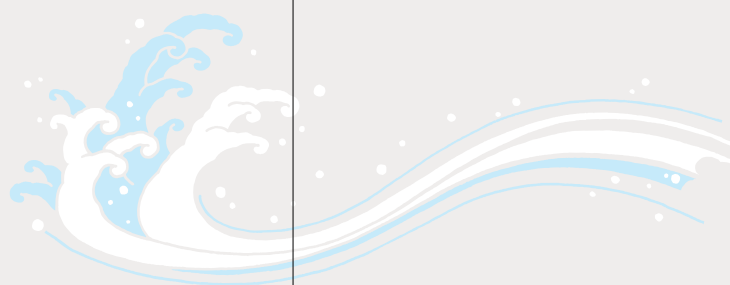
人から人へ伝わって

経営の経験もなく、MBA（経営学修士）のような資格もない田口が経営コンサルタントの会社を興したことはすでに書いた。常識的に考えれば、無謀という以外ない。しかし、田口はその状況から現在に至る地歩をその当時につくっている。なんと、日本を代表する五人の経営者から仕事の依頼がくるようになったのだ。しかも、その人たちは今でもつき合いがある。

その人たちとの出会い方はさまざまだ。しかし、基本的には人から人への紹介である。つまり、その人たちと田口とを結びつける役割を果たした人がたくさんいたということ。その役割のためだけに、田口の前に現れた人もいたという。すなわち、彼らは田口という人物に会い、なんらかの力を感じたので、紹介したいと思ったのだろう。まだ若い田口が、日本を代表するトップたちに、「トップとしての心構えを説く」ことになるうとは…。

まさに人間社会ならではの醍醐味である。





事業の絶頂期

自己に^{かえ}反る

日本を代表するC I会社となり、事業が成功したかと思えた時、もう一度自分の生き方を考え直した



C Iブームの波にのって急成長

三十代の田口を総括すれば、後に大きく飛躍するための「人間づくりの時代」と言えるかもしれない。四十代になると一転して大きく変貌する。

田口の仕事ぶりが人から人へ伝わり、仕事の依頼が急増し、それにとまって社員の数も増えた。多い時は百人くらいの社員を抱えていたという。

「事業の成否という観点でとらえれば、四十代は最も成功した時代と言えるでしょう。バブルの追い風もあって、世はC Iブームとなり、多くの有力企業がこぞってC I[※]を導入しました。C Iとは会社の理念や行動規範、組織、商品政策、イメージ戦略などを総合的に再構築する試みですが、イメージ・プランは日本を代表するC I会社となりました。どの会社にもお金が余っている状況でしたから、お金がどんどん入ってきて、そして飛ぶように出ていきました。その結果、外面的には会社の規模が大きくなり、優れた会社になったと言えたでしょうが、内実は毎日資金繰りに苦労していました」

一九八〇年代後半から九〇年代初頭にかけて、たしかにC Iブームというものはあった。多くの有力企業がシンボルマークやロゴタイプを新たにし、あたかも会社そのものが生まれ変わったかのごとく、しゃれた広告で謳った。ひとつのマークが何億円、一行のコピーが数千円と、表面的なことだけが取り上げられ、話題になった時代だ。さらに多くの企業が「メセナ」と称して文化活動に走り、太平の時代を謳歌した。

しかし、やがてバブル経済は崩壊し、C Iブームは去った。自ずと然り、経営者たちの考え方も変わった。というより、あるべき姿に落ち着きを

取り戻した、と言った方が正しいかもしれない。

喧噪の中、「自己に反る^{かえ}」を自ら実践

賢明なことに、田口は世の中が変化する前に、自らの内側からの声にしたがって軌道修正を行った。すなわち、バブルが崩壊する前に、自らの会社の繁栄に疑問符をつけたのだ。

売り上げを伸ばし、社員を増やし、会社の「見えてくれ」はよくなっても、内実は資金繰りに奔走している自分の姿を冷静に客観視した時、自分が望んだ姿になっていないことに気づいたのだ。

田口は、四書から学ぶべき中心は「人間性」と「社会性」にあり、その要点は、常に「自己に反る」ことにあると説くが、四十代後半のある時、経営の絶頂期において四書の教えにしたがって、自分の立ち位置を「あるべき位置」に戻す試みをしたのである。

具体的には、一九九三年八月三十一日をもって会社を閉鎖することに決めたのだ。それに伴い、同名の新しい会社を興し、勤務条件をかなり厳しくし、継続して働く気があれば採用するとの通知を全社員に出した。その結果、契約社員も含め四十三人いた社員の内、会社にとどまったのは六名のみ。事業を大幅に縮小し、経営の第一線から退いた。

八ヶ岳に小さな山荘をもち、一人こもって座禅に励み始めるのもこの頃だ。なぜ、二十五歳の時の大事故で自分は死ななかったのか、もう一度、問い直した。この社会の中で自分が果たすべき役割は、もつと本質的なことにちがいない。しかも、田口佳史にしかできないことが必ずあるはずだ。その問いに対する答えを探索することは大きなブ

レッシュヤーとなったが、避けて通るわけにはいかなかった。

その時に得た結論は、もう一度四書五経を学び直し、自分なりの経営思想を構築することだった。否、経営にとどまらず、あまねく通用する「人間としてのあり方」を体系化した独自の思想をまとめようと思ったのだ。幸い、事業の絶頂期にあっても勉強だけは絶やすことはなかったので、その目的に向けて円滑に始めることができたのである。

タオ・マネジメントを発表

五十にして天命を知る。

五十歳の頃に始まったその試みは、その後五年間を費やして、ついに完成した。

その名も、タオ・マネジメント。タオとは、老荘思想、つまりタオイズムのタオであり、「道」をいう。道とは、この世を統^すべるすべての根源のことである。

この世とは、天と地、さらに動物、植物、鉱物、そして空気などの「気」がある体系のもとに相互補完的に関係することで成り立っており、それらの根源こそ道であるという考え方である。

それを経営思想として体系化させようという試みは、まだ果たされていない未開拓の荒野であった。そして、一九九八年、三十歳からの命を賭けた勉強と自身の経営体験とを糧にしてまとめた思想を『タオ・マネジメント』として著す。

「それまでは人が作った経営思想を借りてきて、自分なりに解釈して解説していましたが、それが完成してからは、自前の経営思想を持った自信がみなぎり、自分が拠^よって立つ位置を確信することができるようになりました」

日本再興の大波を起こす

今こそ自分が培ったものを生かし、社会に役立てる時

田口佳史の天性

人間には生まれながらに備わっているもの、すなわち「天性」がある。これは、天が人間として生まれなさいと命じた時に、これを持って行きなさいと授けてくれたもの、と田口は言う。天性を「天分」と言い換えてもいい。要するに、この世に生まれたすべての人間に、そのような特別な性質、能力、役割があるというのだ。

では、田口の天性とはなんだろう。

老荘思想をベースに培った独自の思想を現代社会に照らし合わせ、社会の歪みを正すという力ではないだろうか。それをなさしめるため、二十五歳の時の事故があり、老荘思想への目覚めがあったのではないだろうか。

その役割をまっとうさせるため、天はあの大きな事故を田口に与えたと解釈するのは、いささか勝手な見方かもしれない。しかし、あの事故がなければその後の田口は万物・万象に通用する普遍的な真理を探究しようとは思わなかっただろうし、それがなかったなら、一万七千人以上もの人たちに講義を啓き、各界の要人たちと濃密な人間関係を築くこともなかっただろう。

今、田口は危機感を募らせている。このままでは日本はダメになってしまう、と。

日本人のほとんどが、漠然とではあっても、日本はおかしな方向へ行っていると思っていることだろう。今の日本は健全な方向へ進んでいる、と自信をもって言える人はほとんどいないと思う。

長い間、ずっと「人間としてあるべき姿」を学び、それをまっとうしていれば誰もが幸せな人生をおくることができるはず、という真理を学んできた田口にとって、現代社会の病巣は手に取るよ

うにわかる。なぜ、人心が荒廃し、社会が悪化の一途をたどっているのかということも。

こんなに幸せな人生はない、と言い切る田口にとって、世の中がどうあろうと、座して見過ごすこともできたはずだ。人は人、自分は自分、と割り切れば、世の中のことなど放っておいて自分のことだけに意識を向けていればいい。

しかし、田口の天性はそうではなかった。それらを見て見ぬふりをする天性は持ち合わせていなかったのだ。

「バンコクの病院で死の恐怖に怯えていた時、窓の向こうに日本の国旗が見え、なぜか涙がポロポロこぼれてきました。せめて日本に帰ってから死にたいと思いました。その日本が、今どんどん崩れているのを目の当たりにして、このまま手をこまねいているわけにはいけないと思ったのです」

今こそ規範づくりを

そもそも現代社会の何が問題なのだろうか。

「その前に、健全な社会とはどういうものだろうか。健全な社会と言えるには三つの条件があります。一つ目は、美風が生きているということ。

誰もが社会を善の方へ引っ張っていく善循環があることです。美風というものは目に見えないものですが、実は物事はすべて見えない分野で決定されています。人間の目に見えるものは、全体のごく一部分であり、そもそもあまり大したものではない場合が多いのです。

二つ目は、家庭、地域、学校が連携して教育にあたっているということ。次代を担う人材を育てるために、三位一体となって規範教育ができていく社会です。



株式会社イメージプランの社屋は数年前、世田谷区祖師ヶ谷大蔵に建てられた。受講生たちがそれぞれの仕事を生かし、労を尽くしたという。



田口佳史は昭和17年、東京都杉並区生まれ。現在67歳。今でも数多くの講義を抱えている。東京都在住。
<http://www.image-plan.net/>

三つ目は、人生を改善するチャンスに恵まれているということ。それを社会が提供しているかどうか健全な社会かどうかの三つ目の条件となります」

では、現代の日本は健全な社会と言えるのだろうか。

「まったくもって不健全な社会と言う以外にないですね。不健全な社会の特徴として、自殺、幼児虐待、自己破産の増加があげられますが、日本はいずれも危惧すべき状況にあります。WHOが発表している最新の統計による自殺死亡率（人口十万人当たりの自殺者数）は二三・七%（〇六年）で、世界で八番目という多さです。母親が我が子を虐待し、死なせるという、人間としてありうべからざる事件も近年増加の一途をたどっています。自己破産は経済情勢とも関わってきますが、それだけではありません。やはり社会の病理として特徴的に現れているのです。」

これら三つの現象は、社会に対して猛省を促しているとも言えます。すべて、原因は見えないところにあります。しかし、先般の総選挙における自民、民主の二大政党のマニフェストを見ても、それらには一切触れておらず、いかに国民にとって得かというバラマキに終始しています。社会が悲鳴をあげているのに、それに対して根本的に対策を打てない政治は、それだけですでに失格と言えます。私は六十代後半からの人生のテーマとして、健全な社会を取り戻すための活動に取り組んでいこうと思っています」

歴史をひもとくと、時代が要請する人物が必ず現れていることがわかる。すなわち、社会が抱える問題に対して、それを解決させようという動きが起こるのである。多くの場合は、優れた人物が

輩出されることによって解決されている。この国でも幕末における未曾有の国難に際して、いかに多くの傑物が現れたかを思い起こせば容易にわかるだろう。西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允という維新の三傑をはじめ、坂本龍馬、勝海舟ら星のごとく人物が現れ、役目を果たした。維新後も伊藤博文や大隈重信など、突出した人物は枚挙にいとまない。

それと比べ、平時にそういった有為の人物を得ることはほとんどない。時代が要請していないのだ。

現在の日本は戦乱状態にはないものの、平時ではなくなっているにちがいない。なぜなら、これまでは見られなかったようなスケールの人物が現れているからだ。筆者が知るだけでも、五人から十人を数えることができる。その内の一人が田口佳史であり、後に紹介する山田宏（杉並区長）である。

「人間の精神の基本は、慈と義から成り立っています。慈とは母親の慈愛をいい、わが子を守り庇って可愛がり、世話をいとわず育て上げる、無償の愛です。子育ては大仕事ですが、すべての母親にこの慈愛が流れているからこそ、途中で放り出さずにまっとうできるのです。」

また、義とは、人間として行うべき道理のことです。父の愛を義愛といいます。義という字は『美しい我』という字からできている通り、人が最も美しい状態を表しています。人は母親から受ける慈愛、父親から受ける義愛をもとに精神が形成されます。

母親から慈愛を受けた子どもには、やがて『惻隱の心』が芽生えます。困っている人を見て気の毒に思う心です。また、父親から義愛を受けた子

どもには、『羞惡の心』、すなわち自己の不善を恥じ、他者の惡を憎む心が芽生えます。さらに譲り合う心である『辭讓の心』と、道理に従って善惡を判断する『是非の心』とが加わり、四端となります。四端とは四つの端緒という意味で、後に仁・義・礼・智になります。これらが人間の精神基盤の根本をなす要素となります。

人生とは、判断、決断の連続です。ですから、その都度、正しい決断ができる人間にならなければなりません。そのためには判断の基準を持つことで、それを規範といいます。正という字を分解すると、一と止に分かれます。つまり、この一線で止まれというメッセージになります。この一線を越えると、それは正しいことではなくなってしまうのです。規範とは、その一線のことです。その一線をすべて法律で定めるには限界があります。今の日本は、家庭でも学校でも規範を教えています。子どもだけではありません。大人にも規範のない人がたくさん見受けられます。本来は社会の鑑となるべく企業経営者が、自社の利益だけを優先して法を犯していることなど、その最たる例でしょう。

現在、家庭では子どもへの躾を怠り、ただ可愛がるだけの『姑息の愛』しか与えず、学校は自己と他者との生活を訓練する場であるのに、誰よりも高い点数をとって勝つということしか教えていません。社会というものは、一人の自己とそれ以外の他者とによってできています。つまり、自分のことだけを考えていたら孤立するのは明白なのに、そういった基本的なことを教えずに知識だけを詰め込もうとしています。今の学校は、社会性を身につけるといふ本来の機能を果たしていないのです。地域社会もそうです。昔の日本では、地

域内に住む大人が素読や礼法、剣術などの手ほどきを子どもたちに行っていました。今は皆無と云っていいでしょう。つまり、家庭、学校、地域など国をあげて人材育成をすべきであるのに、皆一様に自分たちの利得にしか意識が向いていないのです。これでは国全体が衰退してしまうのは必定でしょう。すべて昔の日本が良かったというつもりはありませんが、こと教育に関する限り、昔の日本、特に江戸時代の教育は人間形成において理想的であったと思います」

教師育成を目的とした杉並師範館に関わる

二〇〇五年、杉並区が採用する小学校教員の育成を目的として「杉並師範館」が設立されたが、田口は副理事長兼塾長補佐という形で同プロジェクトに深く関わっている。もともとは、山田宏・杉並区長からオファーを受けたことが発端だったが、人の師範たりうる教師を育成しようという点で二人の志は一致していた。その後、元米国ソニー会長・田宮謙次氏を副理事長兼塾長として招聘し、活動が開始されている。

杉並師範館の設立趣意書を読めば、その目的がよくわかる。まず、現代日本の社会を分析。あらゆる分野での行き詰まりに言及し、返す刃で教育の実態に踏み込む。

——教育においても事態は同様であり、知識技法偏重に過ぎて、精神的基盤や自ら考える力の充実を図る教育は著しく欠如しているといわざるをえません。——

その上で、古来、日本は社会に有為な人材育成に多大な力を注いできた事実と言及し、「今、教育体制の中にこの気風と伝統を取り戻すこと」が

急務であり、「その存在自体がより良い感化を生じる『気高い精神と卓越した指導力をもった教師の育成』が重要だとしている。さらに、「我々は『教育は人なり』を信条とし、真に教職を志す人を求め、ここに杉並師範館を設立します。ここでは、人が人を育てるという最も崇高な仕事に強い使命感をもち、知識を教えるにとどまらず子どもの可能性を引き出し、人間性を育ててゆける人間力豊かな教師の育成に心血を注ぎます」と続く。設立趣意書というより、檄文といつていいだろう。力強く、気高い精神にあふれ、無駄がなく、凛として美しい。

杉並師範館は定員二十五人前後に対し、毎年二百人前後の応募がある。かなり狭き門と言える。講師陣は各界で実績をのこした民間人があたる。塾生は土・日もほとんど休まず勉学に励み、一年後、教師として現場に出ていく。すでに第一期生のうち、二十人、第二期生のうち、二十九人、第三期生のうち、二十二人が杉並区立小学校の教員として採用されている。

「大方の評判は良好です。多くの方々から師範館卒業生は礼儀正しく、一本筋が通っているという印象が強く、こうした教師が経験を積んで、どんな立派な教師になるか楽しみです、と言っていただけです」

杉並区のこの動きは、他の地域にも波及している。埼玉県では「埼玉師範塾」、横浜市では「よこはま教師塾」が開設された。この試みが実を結ぶのは数年、数十年先になるだろうが、この波が全国に広がれば、日教組や左翼思想の人たちによって奈落の底に落とされた日本の教育が復活するきっかけになるかもしれない。

田口佳史の主な著書

東洋からの経営思想



悠雲舎

清く美しい流れ



PHP研究所

日本人なら
必読の書

TAO MANAGEMENT



East Bridge ※右の英訳版

タオ・マネジメント



産調出版

人生尊重なき企業は減じる



TBSプリタニカ



家庭教育を抜本的に改革する

次いで、田口は家庭教育に目をつけた。前述のように、本来、家庭において規範を教えるべきであるが、現在の日本では、それがほとんど機能していない。それを正すために、田口は一般社団法人「日本家庭教育協会」を設立した。子育ての要点をまとめたハンドブックを第一子誕生の際、すべての親に母子手帳とともに支給することや、家庭教育アドバイザーを全国から募集し、養成すること、障害や苦難を乗り越えた家族を顕彰する制度などの他、親子でいっしょに映像を見ながら、ともに「人間の基本とは何か」を学ぶことができるDVD十二巻セット『親子で学ぶ人間の基本』を完成させた。収録時間は計十八時間以上に及ぶ。もちろん、素材は中国古典である。

一見、難解な文章が田口の解説によつて、子どもでも理解できる内容に咀嚼されている。株式会社AOKIが発売元となっており、楽天でも購入できる。

日米中共同フォーラム

田口の視線は国内だけにとどまらない。「飛躍的に発展する中国に対し、いかなる形で日米両国が共同で助言・苦言を提示し、世界の平和的・安定的発展に貢献することができるか」を目的とし、昨年、日米中三ヶ国によるフォーラムを立ち上げた。メンバーには三ヶ国の重要人物が約二十人、ずらりと並ぶ。これはまた、世界から日本を見つめ直そうという試みでもある。



日本の将来は、

傑出したリーダーを選び

人間の救済は人間のみ可能、とすれば、
優れたリーダーを選ぶことは、
私たち国民に突きつけられた、
最大の課題ではないでしょうか。



タオ・クラブ受講生のシンポジウムでスピーチする山田宏氏。
撮影／鈴木慶子

中国古典の本義は、「人間の救済は人間のみ可能」であるらしい。神仏など見えざる力の存在は否定しないが、それは人間がやるべきことをやった後に得られるものではないかと思う。

であるならば、不健全になった社会を正しく再生するには、どうしても優れたリーダーの力が必要だ。しかも、そのリーダーは並の器ではない。高所から国家全体を俯瞰し、末代まで繁栄が続く仕組みを作る構想力、どんな危機にも動じない胆力、ここぞという時は抵抗勢力をこっぴどく蹴散らす圧倒的な実行力。そのような飛び抜けた能力を持つリーダーを数人戴くことができれば、ここまで閉塞した社会が一気に息を吹き返すことだってありうる。

明治新政府は廃藩置県（それにとまあ四民平等、徴兵制度）、地租改正、廃刀令など、一気に改革を進めてしまった。ダラダラやってたら、平成の世直しもそれと同じようなことが言える。

日本の社会を再び「清く美しい流れ」が横溢する社会に戻したいと考えている田口が、リーダー選びに目を向けたのは当然と言えば当然のこと。田口は、同じような危機感をもつ同志と、真にこれからの日本を託せるリーダーを選び、その人を支援することで世直しをしようと話し合った。従来のように政党内の力学や「選挙の顔」としていかどうかでこの国のリーダーを決められたので

はかなわない、と思ったのだ。

「私たち三人は、三年かけてそれぞれができる限り多くの政治家と討論し、人物を見極めようとしたのです」

田口は自らが主宰する講義を通じ、政界・経済界・文化人など膨大な人的ネットワークをもっている。他の二人も同様だった。それらを最大限に生かして情報を集め、「ここに人物あり」と聞けば、出向いて面会し、この国のあるべき姿について議論を交わした。

しかし、どの政治家も反応は鈍かった。あなたの言いたいことはわかるが、現実的にこういう問題があつて行動に移せない。自己保身から、行動を起こせない政治家ばかりだった。

「三年間、吟味に吟味を重ね、三人が集まって、それぞれが結果を述べました。そして驚いたことに、三人が三人とも、同じ人物を推したのです」それが山田宏・杉並区長であった。

田口佳史と山田宏

前ページで紹介した杉並師範館でも田口と山田は共闘を組んでいるが、二人が出会ったのはかなり前に遡る。山田がまだ松下政経塾にいた頃、田口は新自由クラブのメンバーであった。その頃、田口は山田を都議会議員選挙に推薦し、山田は当選した。都議に推薦したからには人物として評価していたのだろうが、当時の山田は際立った印象はなかったと田口は言う。

この男に託したい。

「どこかですれ違えば挨拶する程度の関係でしたが、それから数年後、すでに杉並区長になっていた山田さんは、本当に同じ人物なのかと疑うくらいに立派な人物になっていたのです。人間とはこんなにも短期間で成長することができるのか、と感嘆した覚えがあります」

小誌の姉妹誌『ジャパニスト』創刊号で山田宏を紹介しているが（※小誌本号付録として、その記事をまとめた小冊子を綴じ込んでいる）、山田は一度落選を経験している。その時に腐らず、自分を磨く絶好の機会だととらえ、ある講座に通うことにした。それが田口の主宰する中国古典思想の講座だったのだ。

「山田さんはただの一度も欠席も遅刻もせず、黙々と勉強を続けていました」

山田宏の人となり、あるいは杉並区長に就任してからの実績については、付録の小冊子を読んでもいただきたい。ひとことで言えば、まさに「待つてました！」と快哉を叫びたいほどの人物である。しっかりした理念、歴史観、哲学、信念の分厚さ、行政手腕など、現代の日本の政界に同レベルの人物を求めるのは困難だろう。

「私は日本の政治家には本居宣長を読むべきだと言っているのですが、彼にはそれを説明する必要を感じません。すでに体得していますから」

そんな山田宏に田口は働きかけた。日本のために立ち上がってほしい、と。ある意味、命を捨ててくれ、と言っているに等しいほど重大な決断を促したのだ。それが今年五月二十八日に行われた



昭和33年、東京都生まれ。京都大学法学部卒業後、松下政経塾第2期生として入塾。都議会議員、衆議院議員を経て、現在杉並区長。

「山田宏に決起を促す会」である。田口は社会的に人望の厚い人たちで脇を固め、その場をもって山田に決起を促した。

その後の山田の動きは果敢だ。七月、日比谷公会堂で「よい国つくろう！ 日本国民会議」の発足を宣言し、中田宏（前横浜市長）や中村時広・松山市長ら同志と日本再生のための動きを活性化させている。小誌の特集記事で二度紹介した中田宏は山田の最大の理解者であり同志であるが、山田への崇敬は増すことはあっても減じることはないようだ。そんな中田を田口はこう評す。

「中田さんも偉いなあといつも思いますよ。彼は横浜市長時代、ゴミ問題、港湾、そして売春街問題など、誰も手をつけられなかった部分に体を張って手をつけ、見事な成果を収めました。それだけで政治家として百点満点です。しかも知名度は山田さんより上。並の人間なら傲慢になるでしょう。しかし、彼はいつも山田さんをたてています。なかなかできることはありません」

田口は中国古典を学びながら、人間としての理想の形を探究してきた。人物を見る審美眼において、田口と比肩する人物を探すのは容易ではないだろう。その田口が絶大な信頼をもって託す山田宏たちの動きに注目していただきたい。

二十五歳の重大事故の後、冴え冴えとした意識の中で田口は白髪の老人と話し、なにごとかの決着をみたと言った。もしかすると、その白髪の老人は老子なのではないか。老子が田口に重大なメッセージを託したのではないか、そう思うのである。